

# かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

## 第 98 号

平成11年3月25日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 施設課 長島 章)

早春の丘 (美瑛)

“ヒポクラテスの誓い”……………	久保 良彦…2	新入学生へのメッセージ……………	林 要喜知…13
第21期生を送るに当たって……………	油野 民雄…3	助教授紹介……………	14
旭川医科大学第21期生卒業生名簿……………	4	スキー教室実施される……………	14
卒業にあたって……………	相沢 圭…4	研究室紹介……………	病理学第一講座…14
卒業にあたって……………	宇佐美 伸…5	新歓合宿のお知らせ……………	新入生歓迎実行委員会…15
student諸君は母校を愛してますか? ……	黒田 浩光…5	平成11年度前期分授業料免除及び延納・分納について……………	15
退官にあたって……………	金沢 徹…6	学生教育研究災害傷害保険の加入について……………	15
停年の辞……………	山村晃太郎…7	平成11年度日本育英会奨学生の募集について……………	15
振り向けば、ただ謙恩-退官のご挨拶に代えて- ……	岩渕 次郎…8	平成10年度1年のあゆみ……………	16~17
教授就任挨拶……………	牛首 文隆…9	学友会会章正式に大学の学章として承認される!! ……	18
大雪山系を眺めながら……………	羽田 明…10	学生団体の設立・継続届について……………	18
就任のご挨拶……………	原渕 保明…11	教官の異動……………	18
教授就任挨拶-術後患者のQOL- ……	岩崎 寛…12	窓 外……………	棟方 隆…18



## “ヒポクラテスの誓い”

学 長 久 保 良 彦

第21期生99名の皆さんに、先ずは医学士の学位取得のお祝いを申し上げます。ご父母のお喜びもいかばかりかとお察しいたしております。

今年は皆さんに二つの贈り物があります。

その一つは、学位記が装いを新たにし、英文併記となったことです。海外留学の折、英文の学士ないし博士学位取得証明が必要となりますが、これまでその都度別途に発行されておりました。本学の卒業生がこれまで以上に海外で活躍して欲しいという大学の願いが込められております。

いま一つは、本学名誉教授 鮫島夏樹先生からで、先生が翻訳されたユリウス・ヒルシュベルク著“ヒポクラテス医学”という本です。小さいながらもなかなか読み応えがあります。先生からのメッセージにありますように、目覚ましく進歩する医学と、目まぐるしく変動し複雑化する医療の中で、ともすれば見失われがちな「医の本質」を改めて考え直す座右の道しるべにさせていただきたいと思えます。

ヒポクラテスは古くから時代と国を超えて「医聖」と崇められ、その名が冠された「ヒポクラテス全集」は最も広く読まれている医書となっております。特にその全集の中に見られる「ヒポクラテスの誓い」と箴言の冒頭に出てくる句が有名で、どなたもご存じのことと思えます。いずれも“ヒポクラテス医学”に載っておりますが、「ヒポクラテスの誓い」は古代ギリシャの医師集団により作られた、医師として守るべき掟であります。ヨーロッパの大学では、医師の資格が授与される際、ヒポクラテスの胸像の前でこの誓いを読ませる儀式が近年まで行われていたことが伝えられております。

さて、最近わが国では、医療とりわけ医師と患者の関係に係わる世間の関心が大変高まってきております。これは、医学の進歩や社会・文化の変化により、これまでの医師-患者関係が世の中の仕組みに相応しくなくなってきたことを意味します。

従来、医師は患者の病気を治すことを第一に考え、その時代の医療レベルからして医師が最も良いと判断した治療や介護を、医師としての信念をもって施すべきだと信じておりました。一方、患者の方も、患者に良かれと努力するそのような誠意ある医師に一切お任せするのが当たり前な世の中でありました。これは、わが国に限ったことではありません。

ギリシャ時代から「ヒポクラテスの誓い」を尊重して、医師は患者のために自分が最善だと信じる医

療を献身的に施すことが医師としてとるべき態度であると、2000年以上にわたって代々教え継がれてきたのであります。

このように立派な心構えは、時に医師をして専門家の私に任せておきなさいと言わせ、医師が知らしむべからず、よらしむべし、という態度をとることにつながりました。封建社会では、一家の主人が最高の権力をもって家の中を取り仕切り、家族は絶対服従を強いられました。このようなあるじの考え方や振舞は「パターナリズム：(父の子に対するような)善意に基づく配慮(統制・干渉)、温情主義」とも言われますが、あるじを医師、家族を患者と読み替えると、それは医師のパターナリズムとしてよく当てはまります。

気が遠くなるような長い歴史の中で、連綿として教え継がれてきた「ヒポクラテスの誓い」を遵守する医療が、何故きしみを生じ始めたのでしょうか。

1960年代、米国で起こり始めた様々な人権運動の一つとして、患者の人権運動が盛んになってきました。そうした中で、「ヒポクラテスの誓い」に見られるような、医師の能力と判断力だけで独善的な医療を進める医療の態度が「ヒポクラテス流パターナリズム」と非難されるようになったのです。それは「ヒポクラテスの誓い」が専ら医師側に立ってみた守るべき人の道で、患者側から見られたものでなかったからです。患者は独善的な医師に一段高いところから管理され、服従させられている弱者であるという認識に立って、患者の人権擁護のために医療における医師の態度の改善運動が起こってきたのです。

わが国でのこのような動きは、ほぼ20年遅れて始まりました。最近ようやく実現された脳死移植を巡るマスコミの過敏すぎるとも思える報道を見ても、わが国における医師の信頼がまだまだ改まっていないことが伺われます。

これからの医療を担う皆さんにとって、「ヒポクラテスの誓い」は絶対に守らなければならない掟に変わりはありませんが、さらにそれを超えて、患者の立場に立って物事を考えるということも欠かせない条件として加えられなければなりません。

“医師は患者と同じ目線で”というのが、これからの医療の実践における最も大切なキーワードであります。

皆さんのご活躍を、心から祈念いたします。



## 第21期生を送るに当たって

第6学年学年担当 油野 民雄

旭川医科大学医学部医学科第21期生の皆さん、御卒業、まことにおめでとうございませう。しかし、5学年から6学年の進級時に2人、そしてこの度の卒業時に1人欠くことになり、結果として全員揃っての卒業に至らなかったことは、学年担当者として全く不徳の致すところであり、残念に思っております。この上は、医師国家試験に全員揃って合格されることを楽しみにしております。

先日、臨床検査医学講座の池田教授より、「毎年の恒例であるから、この“かぐらおか”に学年担任として卒業生に送るはなむけとして寄稿して欲しい。」との依頼を受けた。このような大学卒業という人生の最も重要な節目に際して、はなむけの適切な言葉が思い浮かばない僕としては、あわてて昨年の“かぐらおか”の久保学長および昨年の6学年担当者の菊池教授の寄稿に目を通して見た。当然ながら、両寄稿とも卒業生を送るはなむけとして非常にふさわしいものだった。今年も久保学長の立派なはなむけが掲載されることと思う。したがって、皆さんへのはなむけは学長からいただくことでお許し願ひ、その代わりに、僕自身の学生時代および卒業時を思い浮かべながら、学年担任として皆さんと接触して抱いた感想を述べることにした。

教官と学生との関係が親密であり、かつ学年担任と学生との接触が頻りに求められる我が旭川医大と異なり、僕が在学した当時の金沢大学医学部では、他の大学でもそうであったように、医学部教授（特に臨床では）と云えば雲の上の神様のような存在であり、どの教授が学年担任であるかもあいまいであり、日常ほとんど教授と学生との接触がみられなかった。その上、臨床のある講座で発生した医局改革への騒動が我々学生間にまで波及し、4年生の時には学生自治を求めて約6ヵ月間、授業ボイコットのストライキまで行ったものである。その影響で、僕

たちより2年先輩の学年は2グループに分裂し、卒業もそれぞれ別個に迎えることになった。僕達自身は、別れての卒業には至らなかったものの、現在皆さんが僕ら教官のために計画してくれる謝恩会を行うこともなく、また卒業アルバムを作成することもなく、決してめでたい雰囲気でも卒業を迎えたわけではなかった。このようなことを述べると、「放射線医学講座教官の油野は屈折してる。」と思われるかもしれない。この旭川医大に赴任して以来、毎年6年生が卒業アルバムに掲載するための写真を教室に撮りにくる時期になると、自分達の学生時代の大学紛争はいったい何であったのか、また随分無駄なことでエネルギーを費やしてしまったと、つい卒業される皆さんのことよりも、僕自身の卒業時を思い浮かべてしまうのである。

この稿では、卒業される皆さんへのはなむけとしては必ずしもふさわしくない、とりとめもない僕自身の過去を述べてしまった。しかし最後に6年担任として一言だけ述べたい。皆さんが医師として巣立って行かれる現在は、僕の卒業時と異なり、明らかに医師過剰時代となっている。ポリクリの時にも話したことであるが、医師の世界にもビックバンが到来したようだ。これからは時代に受け入れられる医師もいる反面、そうでない医師も当然生じてくるであろう。医師として求められるのは、知識、技能、態度であることは自明のことである。ほとんどの医師がこれらを習得している。したがって、他の医師が保有していない、それ以上の何かを当然身につけていくことが今後生き残っていく上で必要であろう。

以上、皆さんは旭川医大に在学したことを誇りに思いながら、来る21世紀に受け入れられる医師として成長し活躍していかれることを、学年担任として切に望みたい。

## 卒業にあたって



第21期卒業生 相 沢 圭

憧れの北海道にやって来て早6年。あっという間に時は流れ、卒業の2文字が国試というおまけ付きで目前に迫ってきました。気が付けば自分

はもうすぐ「先生」と呼ばれる存在になろうとしています。

親戚も知人もいない旭川での初めて一人暮らしに始まったこの6年、多くの友人・先生との出会いや大学での講義・実習を通して、本当に多くの事を学び、経験しました。そんな大学生活の中で私にとって大事件だったことは、小さい頃からの夢だった乗馬を始めたことでした。一見言葉の通じなさそうな相手との手綱を通してのコミュニケーションに、マニュアルどおりにはいかない生き物の面白さを感じました。それぞれの馬の個性に合わせ、叱ったりなだめたり、扶助を強めたり弱めたり、その日の馬の気分にも気を使い、逆に馬もこちらに気を使って。

そんなこんなで全く同じように乗馬できる日はほとんどありません。乗馬をしていて気付くのは、馬から教えられる事の多さです。何気ない動作でも、こちらが注意すればする程、馬が騎手の彼らへの接し方について様々な批評をしてくれていることに気付かされました。さすがは乗用馬のプロ。

これから医師として社会に出るにあたり、現時点では知識力・技術力・判断力、何をとっても自信のあるものではありません。だからこそ大きな可能性がある訳ですが、ただ一つ、常に心に留めておこうと思うのは、どんな相手・対象からでも何かを学ばせてもらおうという謙虚な心構えです。当然のことではありますが、当然である程忘れがちになるものです。確認の意味で今一度言葉にし、目標にしたいと思います。

四半世紀をかけて、やっと社会人としてのスタートラインに立てそうです。今の私を創り上げて下さった多くの方々、そしていつも力強くバックアップしてくれた両親に心から感謝の言葉を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

## 「卒業にあたって」



第21期卒業生 宇佐美 伸

中学高校時代は剣道に明け暮れた。まるで武道学科の学生のような毎日だった。休みは盆と正月のみ。稽古が終わって外に出るといつも辺りは暗くなっていた。旭川医大では、高校時代

運動部に所属していた人も少数派であるから、私のような学生はそういった意味では稀な存在なのかもしれない。

大学に入学後、剣道部に所属したものの稽古は以前の比ではなく私には膨大な自由時間が与えられた。そこで私はカゴの中の鳥が大空に羽ばたくが如く、6年間存分に楽しんだ。摩周湖、宗谷岬、利尻礼文、知床、美幌峠からの屈斜路湖、オンネトー、納沙布岬....とにかく素晴らしかった。その中でも私は美英にとり憑かれ、もう何度愛車を走らせたことだろう。不思議なことに、美英は、その都度私に違ったどこか新鮮な感動を与えてくれた。だからこそ私は何度も、そこに向かったのかもしれない。

これは、美英が時々刻々と変化しているからでも

あろうが、むしろ私が変化していたからともいえる。

ふと自らの6年間を振り返ってみる。大学での勉強は、医学的基本事項を理解し暗記するという作業が多く、それがすべてのような印象をともしればもちがちになるが、果してそうであろうか。暗記したことをすべて忘れ去ってそこに残るものこそ、以前とは同じでない変化した自分、つまり6年間の成長だろう。授業では、いろいろな見方ができる事実をそれぞれの先生方がどう捉えているのかといったことを知ることができたし、また臨床実習では、先生方が奥深い医学の道をどう歩まれているのかといった姿にじかに触れることができた。親友との貴重な思い出深い夜を徹しての語らい、ポリクリの仲間との様々な話、すべてのものから私は影響を受け続けた。そして、もちろん美英の丘からも。

6年前と比べて、何がどう成長したかを今、明確に述べられるかどうかは別として、今は6年前とは全く違った美英を見ている。

今後決して甘くはないであろう修業の道を歩いていくうえで、この6年間は大いに生きてくると思う。そして、何年後になるか分からないが、必ずまた、美英に会いに来ようと思う。その時が今から楽しみである。

## student諸君は母校を愛してますか？



第21期卒業生 黒田 浩光

気がつけばもう6年間が経とうとしており、なんの縁だか「かぐらおか」への原稿の依頼がきてしまった。しかも父兄に送付され、顔写真が出るのはいかんせん気が引ける

というものであるが、とりあえず振り返ってみたいと思います。

私はサボるほうを専門としていたので講義に関しては特に覚えていることと言えば、徘徊講義またの名をライブ講義と称される喜久地先生(仮名)の「Student諸君はもっと母校を愛しなさい。」ぐらいで、あとは講義を抜けようとして谷地久先生(仮名)に見つかり、雷を食らったことと入局説明会なのか講義なのかわからない与志駄先生(仮名)の講義が特に印象的でした。

しかし、医学科といえば最後にはポリクリなる医師ではなく学生でもないような中途半端な実習がありその中でもいろいろありました。例えば、耳鼻科

の実習中に、大唾液腺のワルトン管をバルトリン腺と答えてしまった人がいるとか、眼科の実習中に、動眼神経麻痺の症状を言ってみてといわれて、世界の与志駄先生といってしまった人がいるとか聞くと、うちの学年にも強者がいると感心してしまうものである。そして、ポリクリを通じて、6年生の時は自分の将来についていろいろ考えることが多く、様々な医局の説明会でいろいろな先生からアドバイスを頂いたことは大変参考(ご馳走)になりました。

また、先輩の薦めで始めることになったアイスホッケーの審判をやることにより、医学に関係のない社会人の方々と接することでいろんなことを学ぶことができたのではないかと思います。試験の前とかは大変でしたが、最近は医者になったらできないのかなと少し不安です。

最後になりましたが、今まで仕送りをしていただいた両親を始め、様々な方々にお世話になり感謝の気持ちでいっぱいです。また21期生のみんながいろいろなところに散らばりますが、頑張っただ方面において活躍されることを期待しております。6年間ありがとうございました。



## 退官にあたって

生化学第二講座 教授 金 沢 徹

本年3月31日付けで旭川医科大学を定年退官することになりました。21年3ヶ月の長きに亘り本学に在職したことになります。その間、教職員の皆様には大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

21年間の歳月は、私にとって長いようでもあり、まだほんの束の間のようにも感じられます。赴任するときは、友人に旭川は気候が厳しくて、とても人の住める所ではないと随分脅かされました。しかし、聞くと見るとは大違いで、実際に住み慣れてみると、旭川の幾分乾いた、大陸的な明るさを持つ風土がとても気に入るようになりました。とくに冷え込んだ冬の日の朝が一番好きで、きらきら光るダイヤモンドダストの中を乾いた雪を踏みしめながら研究室に向かうときは、身も心も引き締まってとても爽快な気分でした。厳しい冬が通り過ぎて、やっと訪れる旭川の春もまた格別で、ほかの土地では味わえないものです。草木が一斉に芽吹き、家並みが冬では想像もつかなかったような木々の緑や花々で飾られると、心も和み、気持ちは開放感でいっぱいになりました。このようにして歳月を重ねているうちに、私にとって旭川は去り難いものになり、退官後もそのままこの地に住み着くことに致しました。

わたくし事はさておき、皆さんご承知の通り、今旭川医大は文字通りその存亡をかけた教育の大改革に取り組んでいて、多くの教職員の方々がこの改革に多大の努力を傾注されています。私はちょうど定年退官で、この未曾有の大改革に参画できませんが、これが大きな成功をおさめることを心から祈ってお

ります。しかし、振り返ってみると、従来の教育方法も教育現場の多年の貴重な経験の積み重ねから生み出されたものですから、それなりの重みがあるように思います。私が云うまでもありませんが、この新旧の長短を取捨選択して、教育改革をさらに進化させ、前進させていかれるものと信じています。

最近、「旭川医科大学フォーラム」の計画が進んでいることを聞きました。この大学の研究を活性化させるため、新任教授の先生方に順番にこれまでのお仕事を話していただくと云うことです。久保学長のご発案と聞いております。この「かぐらおか」が発行される頃には、もう第一回目のフォーラムが開かれていることでしょう。大変素晴らしいことです。将来はフォーラムの幅を少し広げて、新任教授のお仕事だけでなく、本学の講座や学科で進められている研究についてもこのフォーラムでご紹介頂ければ、一層素晴らしいと思います。そうすれば、本学で行われている研究に対する学生諸君の理解と共感も得られ、また本学全体の志気を多かめる上にも役立つかと思えます。

取り留めのない話になりましたが、最後にこの旭川医科大学が今後教育と研究の両面で素晴らしい成果を挙げられるよう心から祈りつつ稿を終えます。





## 停年の辞

衛生学講座 教授 山村晃太郎

広辞苑によると停年は定年とも記載、いずれも一定の期を迎えて、退職、退官することとなっておりますが、私としては、停年という文字からは強制的に役職の執行を停止させられるという意味合いが強く、また定年という文字からは何か人生の有様が運命的に定められているという印象が残ります。

いずれにしても日本の年功序列制下の雇用形態ではこの停年制が生ずるといえるのはよく分かっているつもりですが、その時が近づいてみるとやはり色々な感慨が湧きます。

私は戦時中の疎開、転校から始まって、住居も勤務先も転々として、50才直前に本学に採用が決まり、以後約16年近い月日をこの旭川に過ごしました。私の定住期間としては生涯で最も長い年月です。

確か昭和47年頃だと思いますが、その頃国鉄労働科学研究所—ここは全国鉄職員に対する健康管理と環境管理などの方法の研究を目的とする。—に勤務し、旭川の国鉄工場（今は既がない。ここは国鉄の客車の木工部品、例えば背もたれ等を作っていた。）の騒音の調査にきていたときに現場の衛生管理者が、工場裏の丘を指さして「あの奥に旭川医大の建設が進められているのですよ」と言われ、その時は別に心にも留めなかったのですが、この旭川医大で停年を迎えるとは、いささか小夜の中山の感じであります。

さて退官に際して、今後の旭川医大の若い皆さんに希望を託したいと思います。世の中の不景気や若い医師に対する研修制度の義務化など厳しい見通しか続き、その故もあってか、基礎医学系の道に進む若い人は寥寥たるものです。何か特別の才能がなければ駄目とか、財産がなければ駄目と若い人は思い込んでいるようです。そんなことはありません。運、鈍、根とって、一つことをそれこそ馬鹿みたいに追求してとうとう大きな発見に到った例は多澤あります。俊才必ずしも学問に向いているわけではありません。

経済的な面を色々と考えて、臨床に進んでもいざ学位論文作成のために研究活動に入り、思わずのめり込んで、とうとう商売換えをして、基礎医学の道に進んだというようなケースも稀にはあります。

研究とは、人間の業のようなもので苦勞も多く、金にもなりません、人をして思わず引きずり込ませる何か魔力のようなものを持っているのではないかと思えます。

芸術の道もそうではないかと想像します。打ち込んでいる時は苦勞ではなくて、何か宗教の三昧境の境地だろうと思えます。

何か通俗的に言われていることについて、一步突っ込んで深く考えるというようなことは人間誰しも備わった能力の一つではないかと考えると、基礎医学の道に一生をかけると深く考えなくとも、何年かその道に浸るといっても特別なことではないと考えます。

研究には基礎研究、目的研究、開発研究等の区別がありますが、その仕事に従事している人の中には、世の為、人の為に役立つ仕事ということで真剣に働いている人もおりますが、大半は面白いからやっている、半ば道楽のような気分で、しかし一生懸命働いているというのが本当のところでしょう。

しかしこの道楽のような気分から、大きな成果が上がるのだから不思議です。例えば、統計学の基礎である確立論などは、賭博に勝つ確率を求めることから始まったことで、探求の動機は必ずしも真面目なものではなかったのです。ともかく数学等は100年も200年も過ぎてから役に立つ学問で、開拓した当の人達は興味があるからで、後生に世の中に大きな役に立つことなど考えていなかったと思えます。

ともかく人生深刻に考えずには是非基礎医学の道に迷い込んでください。学年試験の時だけ廊下ですれ違わざまにお辞儀をしないで、臨床にいても忘れずに基礎医学を振り返ってください。



## 振り向けば、ただ謝恩 —退官のご挨拶に代えて—

心理学 教授 岩 渕 次 郎

最終講義を、大仰にも「心理臨床40年をなぞる」などとした許りに、いざ草稿となってその軽率ぶりを甚く悔いることとなりました。なにせ道の民生部局10年(3部局)・衛生部局5年に加えて本学四半世紀に亘る歷程を辿りだすと、徒らに尽きぬ追想に押し流されるだけで筆は一向に進まず、捗るのは酒と煙草ばかりという始末でした。半ば自失のそんな中で、ときに心過(よ)ぎる情景のひとつが、本学開学時の木造仮校舎(教育大・旧附属小学校)です。

それは、まるで舎屋全体が蒼古として雪なかに沈みこみ、肌刺す寒気に教室は暗く閉されていました。そこでの講義が又、変則開学故の週27コマ(現行は18コマ)、冬休みなどはほんの6日間という強行軍でしたから、当初はバスに乗り違えたかのように狼狽える諸君も居て当たり前でした。

実際、一期生にとってあのひと冬は、誰もが過重な課業と酷寒に音をあげながら、本学に学ぶ己がidentityを改めて問い直さざるを得なかった、重大なcrisis状況だったに違いありません。しかし今ではそれも、彼らの懐かしくも誇らしき青史の一頁にすぎないのでしょうか。

尤もその創設期は、私にとっても大学人としての同一性が厳しく問われた、恐らく人生最大の危機場面でした。想えば、道職員15年の向うにそれ相応の未来が展がるなかでの転身は、それこそ“不惑”の齢にしてあるまじき“大いなる惑い”でした。

いわば“四十の手習い”で始まった大学生活は、それ故に専ら先輩諸賢から教育・研究の“奥義”を盗むのに忙しく、しかし、気付けば既に“六十の手習い”に入って尚その奥義に手が届かぬまま、ここに退官の刻を迎えてしまいました。

それはとも角、かつて私は前任地(現・道立精神保健福祉センター)でその創設に参加する機会に恵まれ、次いでまた本学の開設にも立会うことができたのは全く幸運でした。しかし、心理学教室の創設に伴う“困難”(と“創る悦び”)は、以前の経験で

遥かに越えるものでした。

とりわけ、開講が迫った実験心理学実習の態勢作りでは、指導スタッフ・道具・場所の目処さえ立たず、事ごとに学内・外に算段を煩わせて(助手枠は基礎医学から、実習器機は札幌医大から、実習室は一部物理学科から各々借用)、どうにか当面の苦境から脱することができました。

幸いにして、間もなく教務職員の配置と学内実験実習費の優先的配分を頂いて、教室創りが軌道に乗り出しました。さらに開学5年後には、予期せぬ学生定数増(+20名)の機縁にも恵まれて、兼ねて念願の施設(心理検査室、防音室、プレイ・ルーム等)が増設され、ここに漸く現行の態勢が整いました。

当教室のいま在る姿が、勝れて当時の教官・事務官諸氏から賜った数知れぬご支援に因るものと、ここに深甚の謝意をこめて記し留めます。

当教室の研究基盤は、伝統的に臨床心理学に置かれてきましたが、その傍ら、助手の交替に併せて新しい分野が次つぎと登場しました(ゲーム理論、グループ・ダイナミックス、生理心理学、認知理論など)。その彼らとの共研の場では、しばしば師弟関係が逆転して、その都度大いに啓発されたものです。

在任中お世話になった助手諸君に私になし得たのは、せいぜい快適な研究環境を提供すること位でしたが、その彼らも幸い若くして他大学に転進(現在教授2、講師2)し、いまや学界でも着実にその名を挙げつつあります。この機会に改めて当教室への貢献に感謝し、各位の大成をお祈りいたします。

なお最後の2年間は、その才知とて無いままに図書館をお預かりした挙句、円安に怯えては外国雑誌の一部購読停止に走ったり、図書課諸氏にはおおよそ実現困難な無理難題を連ねたりと、関係各位にご迷惑ばかりお掛けして参りました。万事退官に免じてご海容のほど願いあげ、末筆ながら本学の揺ぎなきご発展を祈念して、退官のご挨拶といたします。



# 教授就任挨拶

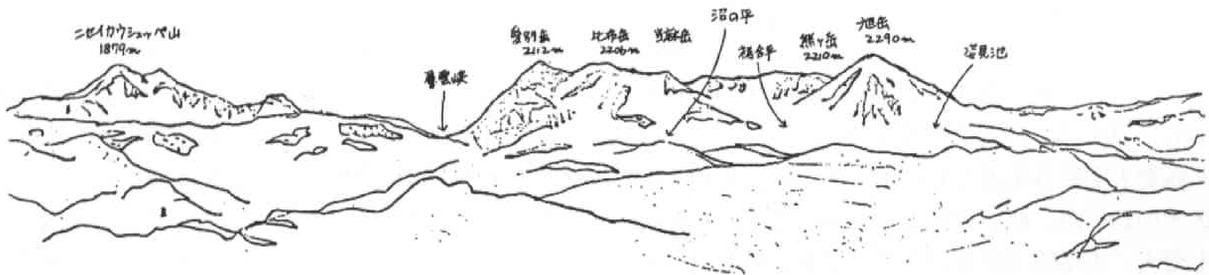
薬理学講座 教授 牛首文隆

昨年10月より薬理学講座に着任し、半年が経過しました。この間、こちらに向かうフェリーでは台風

に追いかけれ今は記録的な降雪を経験しています。私は、プロスタグランジンやトロンボキサンなどのプロスタノイドの受容体について研究を続けてきました。まず、簡単に研究経過を紹介します。研究当初は、トロンボキサン受容体の性格付けや定量をするために、受容体に結合する放射性あるいは光親和性リガンドの作成を行いました。ついで、ヒト血小板よりトロンボキサン受容体を精製し、精製蛋白質の部分アミノ酸配列を基に受容体のクローン化を行

いました。その後、ホモロジークローニングの手法を用いて、8種類存在するプロスタノイド受容体のクローン化を進め、これらの受容体遺伝子を欠損するマウスの作出を行いました。また現在は、これらのマウスを解析することにより、生体におけるプロスタノイドの果たす役割の解明を目指しています。今後は心血管系を中心とした解析を行いたいと考えています。

これから旭川医大の皆様のお世話になることと思いますが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



大雪山連峰



## 大雪山系を眺めながら

公衆衛生学講座 教授 羽田 明

昨年11月付けで旭川医大に移って参りました。着任した日の研究室からみた大雪山系の眺めは素晴らしく、この環境で仕事に打ち込めることに感謝しています。私は、熊本大学を卒業後、岡山、横浜、大分において小児科医として働き、30歳にして熊本大学の大学院に入りました。修了後ユタ大学、名古屋市立大学を経て北海道大学で6年間を過ごした後、旭川に来ました。その間、振り返ってみて仕事に自己満足できるのは熊本とユタにいた時代です。熊本の阿蘇山、ユタのロッキー山脈と両者とも雄大な山々のすそ野に位置する土地です。その意味でも大雪山系の麓にある旭川で意味のある仕事したいと念願しています。

ところで、高校までは広島県で過ごしたので、必然的に広島カープのファンですが、息子は名古屋に住んで以来、中日ドラゴンズのファンで、プロ野球が始まると親子で争いが絶えません。プレイするのも観戦するのも好きなのはバスケットです。NBAはもちろんユタジャズに肩入れしていますが、昨年のファイナルでマイケル・ジョーダンひとりにやられてしまい、彼が引退した今年、ベテランとなったカール・マローンとジョン・ストックトンの活躍で短くなったシーズンを利して優勝することを期待しています。今年も仕事の合間に<http://www.nba.com/>にアクセスしてしまいそうです。

北海道大学に6年近くもいましたので、北大と旭川医大の良い点、悪い点がよく分かります。北大は旧七帝大、大学院大学ということで少なくとも当分は生存が保証されていますが、旭川医大は新設単科大学ということで、よほど存在意義をアピールしないと生き残れないのは確かだと思います。しかし、決して悪いことばかりではなく、逆に考えれば小さくて小回りが利くこと、危機感があることで、北大よりも教育、研究に新しい試みを導入しやすいし、各講座の垣根もはるかに低いので協力体制も組みやすいのではないかと感じています。これからの激動

の時代、うまくやればマイクロソフトが巨人IBMをしのいでしまうのと同じ事が起こせるかもしれないと夢想しています。

私の領域で現在、企んでいるのは北海道における遺伝診療システムを北大、札幌医大に先駆けて確立し、全道に広げてしまえないかということです。遺伝診療といっても出生時において2%弱の古典的なメンデル遺伝病や染色体異常だけを念頭においているわけではありません。出生児の6%をしめる先天奇形、さらに60%以上のヒトが罹患する本態性高血圧、糖尿病、悪性腫瘍、虚血性心疾患などの生活習慣病に対応するためです。現在はまだ、原因遺伝子はほとんど明らかになっていませんが、ヒトゲノム計画の主要なターゲットは今や生活習慣病の原因遺伝子解明です。数年以内に多くの原因遺伝子がわかってくると予想されます。原因遺伝子とその変異が明らかになれば、疾患の発症しやすさが発症前にわかるため、その個人の遺伝素因に基づいたオーダーメイドの疾患予防の可能性が開けるのです。しかし、この疾患予防システムが実現しても、現在の主治医と患者だけの枠組みではとても対応できません。最も大きな問題点は倫理的諸問題の発生です。本人だけではなく、家族の遺伝情報も同時に管理することになるため、遺伝診断に関する守秘義務の徹底には注意を払わなければなりません。結果の告知、情報の提供はまさに遺伝相談であり、臨床遺伝のトレーニングを受けた専門のスタッフがあたるべきであり、クライアントの「自発性と自己決定」は特に尊重する必要があります。現在、全国の大学で信州大学のみが遺伝子診療部を発足させ、スタッフカンファレンスにより問題のある症例は一例ごとに討議して決定しています。将来の需要増は必至ですので、今のうちに整備すれば旭川医大の一つの特徴となりうると思います。できるだけ早く準備を始めたいと思いますので、どうか皆様のご支援をお願いいたします。



## 就任のご挨拶

耳鼻咽喉科学講座 教授 原 洵 保 明

この度、平成10年11月1日付けをもちまして海野徳二名誉教授の後任として耳鼻咽喉科学講座・教授を拝命いたしました。もとより浅学非才の私が、このような大任を仰せつかり、その責任の重さに身の引き締まる思いがしますが、本大学並びに耳鼻咽喉科学教室のさらなる発展のために、身を粉にして頑張りたいと思っています。私は旭川東高校出身で、昭和57年に旭川医科大学に4期生として卒業させていただきました。その後、札幌医科大学耳鼻咽喉科に入局致しましたが、このたび17年ぶりに母校に戻ることとなりました。赴任時、最初に思ったのは大学や大学周辺の発展ぶりでありました。学生時代、畑に囲まれていた大学周辺は住宅が建ち並び、背丈ほどであった街路樹も高く生い茂り、また、大学と病院の設備の充実ぶりにも隔世の感があります。

私の研究テーマのひとつは上気道の粘膜免疫に関する研究であります。特に扁桃の感染防御機構とその病態に関する免疫学的研究については、卒業して以来、継続して取り組んで参りました。また、海外留学（ニューヨーク州立大学バッファロー校）の際には、小児反復性中耳炎の病態について細菌疫学的免疫学的アプローチからの解明に取り組み、現在も同大学との共同研究を続けています。また、頭頸部悪性腫瘍に関する分子腫瘍学的、ウイルス学的解析にも興味があり、従来頭頸部領域で進行性鼻壊疽と呼ばれていた病因不明の疾患がT/NK細胞由来の悪性リンパ腫であり、しかも原因がEBウイルスであることを発見致しました。今後は、当教室の伝統である上気道および前庭の生理学的研究、並びに鼻アレルギーに関する研究を継続しつつ、私がこれまで行ってきた扁桃、中耳の粘膜免疫や頭頸部悪性腫瘍に対する分子生物学的・ウイルス学的解析を加えていこうと思います。

近年の耳鼻咽喉科における外科的治療は耳科・側頭骨外科と頭頸部外科に大きく分かれます。耳科・側頭骨外科では慢性中耳炎に対する鼓室形成術が代

表でありましたが、最近では聴神経腫瘍、顔面神経麻痺、めまいに対する側頭骨外科も発達して参りました。さらに、従来治療法が全くなかった高度感音性難聴（聾）に対する治療として人工内耳手術が先進医療として開発され、感覚器官の代用臓器として高度難聴者に多大な福音と希望を与えています。私はこれまで養った人工内耳手術の経験をもとに当科に本手術を導入したいと思っております。頭頸部外科の範囲は鼻、咽喉のみならず、耳下腺、顎下腺、甲状腺など頭頸部全体に渡ります。最近では頭蓋底外科や血管外科もその守備範囲となっております。また、頭頸部悪性腫瘍においては音声機能や嚥下機能を回復するための形成外科の再建術も発展しております。一方、耳鼻咽喉科の小手術には日帰り手術（day-surgery）の適応となる疾患が数多くあり、可能な限り取り入れたいと思っております。

以上のように現在の耳鼻咽喉科・頭頸部外科・気管食道科・神経耳科・アレルギー科と称するような非常に幅広い分野を扱う科であります。加えて、聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚、嚥下、発声などひとが生きて生活する上で最も重要な機能を扱う科でもあり、21世紀に最も発展する分野のひとつであります。

私をはじめ教室員一同、至らないところも多々あると思いますが、若いながらも誠意と情熱が満ち溢れた活気ある教室にしたいと思っております。各講座の諸先生方のご理解とご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。





## 教授就任挨拶 — 術後患者のQOL —

麻醉・蘇生学講座 教授 岩崎 寛

平成10年11月1日付けで、初代小川秀道教授の後任として麻醉科蘇生科を担当することになりました。自己紹介をかねて新任のご挨拶を申し上げます。

私は旭川から程近い上富良野町に生まれ、富良野高校から札幌医科大学に進み、昭和50年の卒業後、直ちに札幌医大麻醉学講座に入局いたしました。初期研修として旭川市立病院、旭川赤十字病院を含め臨床麻醉、救急医療などに携わってきました。昭和58年から旭川医科大学手術部副部長（講師）として2年間当大学病院で臨床、研究をさせて戴いたことがあります。その後札幌医大に戻りましてアメリカ・エール大学での2年余の研究生活を経験し、今回、赴任することになりました。麻醉・蘇生学は外科手術に対する除痛のための臨床麻醉から発展し、現在は重症治療（集中治療学、救急蘇生学）そしてペインクリニックと領域が拡大し全身管理学あるいは生命機能管理学と捉えられ、医療の中での位置付け、守備範囲は広がっています。

多くの疾患は疼痛感覚で疾病を自覚、認識し、医療機関に赴く。つまり、疼痛対策が医療の原点といっても過言ではない。しかし、MRIやエコーなどの疼痛を伴わない医療技術の発展はあるものの現在の医療はその対象であるはずの疼痛を伴う検査、手術が、診断および治療という名目で選択される。特に、手術による治療は手術中のみならず手術後の疼痛対策が患者のQOLの向上には極めて重要である。私が麻醉科医になった20数年前には麻醉適応の拡大、安定した麻醉管理などが主眼であり、術後の疼痛対策は極めて貧困であり術後患者のQOLからみると悲惨であったと言わざるをえない。その後、疼痛伝達機構の解明、内因性鎮痛物質の発見、持続

硬膜外麻醉を中心とする術後鎮痛法の進歩および強力な鎮痛薬の開発などにより術後疼痛対策は急速に進歩し、術後患者のQOLは飛躍的に改善してきたと思われる。今後は、これまであまり重要視されてこなかった吐き気、嘔吐などの愁訴や精神的・心理的アプローチなどによる医療が更なる術後患者のQOLの向上に必要である。

このように、麻醉科の努力により周術期の患者は比較的快適に成ってきてはいるが、退院後に手術部位の鈍痛、シビレ感、違和感などにより仕事への復帰はもちろん、日常生活すら困難な患者さんがわれわれのペインクリニック外来を訪れるように成ってきている。周術期を手術直後に限定することなくもう少し、長期的な意味での周術期の疼痛対策の必要性が痛感させられる。私の主要な研究テーマの一つは、妊娠に伴うエンドルフィンを含めた内因性鎮痛機序の薬理的検索と慢性侵害刺激に対する鎮痛効果に関するものであります。この研究をさらに発展させることにより後患者のQOLの向上に寄与したいと考えております。

今後、さらに、臓器移植医療の実現化が目前の医療では、手術に起因する肉体的疼痛とともに精神的疼痛管理が更なる術後患者のQOL向上のうえで重要となる。単科に拠らない多角的な医療が真の意味での術後患者のQOL向上に必要な時期にさしかかってきており、その比重は今後増大することが予想される。私は外科系医師やコ・メデカル・スタッフとの調和に配慮できるようなバランスのとれた有能な麻醉科医の育成が術後患者のQOL向上に役立つものと考えております。皆さまの御協力、御指導宜しくお願い致します。



## 新入学生へのメッセージ

生命科学 教授 林 要喜知

私は、新設一般教育科目である生命科学の担当教官として、昨年9月1日付けで本学に着任致しました。折しも、本年4月より医学科では新たなカリキュラムがスタートする時期にあたり、その総合生命科学の一端のみならず、看護学科の生命科学科目を担当致しますことは、光栄に感じつつも、それらの教育に対する責任の重さをも痛感しております。本稿では、特に、講義その他でかかわり合いをもつ新入学生に対して自己紹介やメッセージを書かせていただきます。

私は、昭和28年に石川県は能登半島に生まれ、その地で高校卒業まで過ごしました。たまたま、岡山大学理学部で生物学を学ぶ機会を得ましたが、実は、大学在学中に一つのこだわりを持ちはじめました。それは、「卒業後は、さらに、幾つかの異なる研究／教育機関でさらに学んでみよう」ということでした。私は、自分の能力や適性は顧みず、将来は研究者／教育者として大学に残りたいと考えていました。ある時、「米国では、自分の研究興味に応じて研究環境を考え、最適なところに移ることが日常的である」という記述を何かの本で読み、そのことに強く影響されたからです。当時は、このような考えを合理的だと肯定する先生方や先輩も私の周囲にいましたが、入学した母校を卒業し、そのまま、大学院あるいは大学のジュニアスタッフとして母校で研究を継続することが、より一般的であったように思います。勿論、どちらが良いかは人により一概には断言できませんが、私の場合は、上述のこだわりの結果、逆に、必要以上に移籍／転籍し過ぎた感があります。理学部を手始めに、医学部、看護学部、大学付置研究所、米国2大学（医学部、生命科学部）、民間企業研究所、さらには、財団法人研究所などに移り、自分の研究や、卒論や大学院レベルの研究指導などに携わりました。環境を変えるということにはマイナス面も多くありましたが、自己啓発された経験も少なからずありました。ここ数年における経済状況の変化については、皆さんもよくご存知のことと思いますが、それが、日本企業における雇用シ

ステムや企業組織のあり方にも大きく影響を与えました。同様に、私達が、時に応じて、積極的に環境を変えることは、個人としての成長過程や組織の合理的運営においても、ある意味、必要な経験であるようにも思われます。話がだんだんそれてしまいましたが、学生には、常に少し先の将来を意識しながら、今、本学で何を学ぶべきかを考えていただきたいと思います。

さて、最後に、生命科学における研究や教育について、私の考えを若干ご説明いたします。生命科学は、かつてなかったほどの勢いで進歩しています。同時に、現代社会が抱えるさまざまな問題も浮き彫りにしています。現代生命科学の展開を正しく理解し、直面する問題に、医学や看護学の視点から取り組むためには、自然科学の基礎をしっかりと学び、その上で柔軟な思考をめぐらせることが不可欠であると考えられます。また、各教科の講義やチュートリアル、あるいは、実習その他で、興味深いことを見出したならば、それを追い求める働きかけを、是非、積極的に実行していただきたいと思います。そのためには、本学が持つあらゆる資源や手段を活用してほしいと、皆さんには期待しております。

研究に関しては、私は、生命科学の領域の中でも、神経細胞生物学を専門としております。細胞と細胞あるいは細胞とマトリクス分子の間での細胞接着は、生命のあらゆる現象と深く関わっております。その接着を担う分子が、脳／中枢神経系においてどのような機能を担っているか調べたり、アルツハイマー病などの脳変性に伴い、神経細胞がどのような分子機構で障害を受けていくかに、私は興味を持っております。超高齢化社会を迎えつつある今日では、高齢者における痴呆が大きな社会問題に発展しつつあります。このような疾患の発症や症状進行を少しでも遅延させることができると同時に、患者／家族のQOL向上を援助できる技術発展も、今、大いに期待されています。私も、基礎研究を通して、このような技術革新に有用な情報を少しでも提供できればと願っています。

## 助教授紹介



氏名 室松 慶子  
所属 英語  
出身大学 北海道大学大学院、  
メリーランド大学  
大学院

### ひと言

留学先のMITより帰国し、11月に赴任いたしました。ここ英語研究室の大きな窓からは、晴れた日には真っ白な美しい大雪山連峰が眺められます。この窓に描かれる四季折々の大自然のパノラマを期待しています。

“北彩都あさひかわ”の清々しい風が、澄みきった空気が、これからの私の研究生活にエネルギーを送ってくれているような爽やかさを覚えます。頑張ります。

## スキー教室実施される

去る12月20日(月)～21日(火)の両日、毎年恒例のスキー教室が留学生6名を含む15名が参加し、富良野スキー場で実施された。

今年は昨年までの北大雪スキー場から富良野スキー場へ変更した最初の年でしたが積雪が例年になく早くスノーパウダーを存分にあじわうことができ、昼はスキー技術講習、夜には懇親会と昼に撮影した講習風景のビデオを観ながら講師及び留学生を囲んでスキーの話で盛り上りスキー三味の時間を過していました。

2日目には、最初、スキーを履いて歩くこともままならなかった初級者も帰るころにはスキーの扱いにも慣れ、冬の代表的なスポーツであるスキーに興味を深めていた。(学生課)



## 研究室紹介

### 病理学第一講座

小幡 雅彦

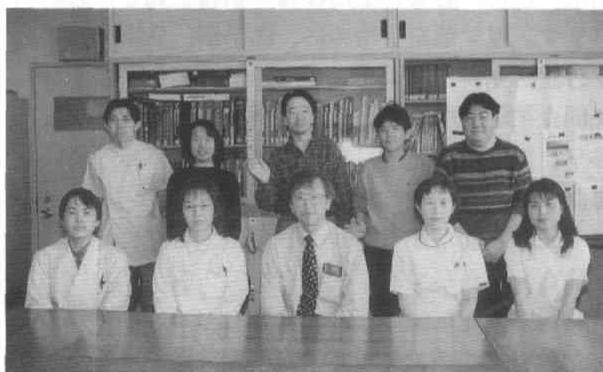
病理学第一講座は小川教授、李助教授、吉江助手、小幡助手の4名のスタッフと臨床各科から研究にいられている大学院生、研究生の5名の先生方で構成されています。当教室出身の方で、1期生の安藤先生が旭川日赤病院病理部に勤務されており、6期生の西川先生はアメリカ留学より帰国し秋田大学病理学第一講座に講師として赴任されています。また、11期生の徳差先生は本学付属病院病理部におられ、皆さん活躍されています。

教室の活動は研究・教育のみならず、病理組織検査の担当もあり、病理学第二講座と共同で当たっています。さらに近隣の医療機関に出張しての病理診断にも従事しています。

教室の研究テーマは動物モデルを用いた発癌機構の解明で、特に、遺伝学的解析がヒトに比べ容易なマウスを使い、分子生物学的手法により肝発癌、肺発癌研究を行っています。近年は主として、マウス

の遺伝的発癌感受性の解析、細胞不死化機構の解析等を行ってきましたが、最近ではメチル化等によるエピジェネティックな発癌機構にも注目し取り組んでいます。これまでに、マウス肝細胞、線維芽細胞不死化における4番染色体の欠失領域の同定、p16やIgf2等のメチル化を受ける遺伝子の肝発癌への関与を明らかにし、肺発癌耐性遺伝子座の18番染色体へのマッピングに成功しています。

最近のゲノムサイエンスの発展は目覚ましいものがあります。当教室も最新の遺伝子解析技術を積極的に導入し、発癌に結びつく新たな遺伝子を同定すべく、日々奮闘しております。



## 新歓合宿のお知らせ

今年も、新入生を迎える行事として「新入生歓迎合宿」を4月10日・11日に行うことになりました。

学内では、新歓委員の説明による学内巡りを行います。また、各クラブが様々な衣装を着てアピールするクラブ紹介もあります。ここで目立ちたい人は、ステージでパフォーマンスをすれば新入生の目はもうくぎづけです。

その後、神居観光ホテルに移動して合宿も本番になります。自己紹介やゲーム、上級生との談話を通して交流を深めたり、各クラブが乱入して新入生争奪戦が繰り広げられます。最後は1年生と新歓委員で飲んで、語って、盛り上がることでしょう。

今私たちはそれぞれの係で一生懸命活動しています。有意義な合宿にするため、多数の参加をお待ちしています。

新入生歓迎実行委員会

## 平成11年度前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成11年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生課専門職員（厚生担当）から必要書類を受け取り、申請期間内に提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

- \* 経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ、学力優秀と認められる場合
  - \* 授業料納期前6ヵ月以内において学資負担者が死亡、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合
- なお、免除基準及び申請期間については、公用掲示板に詳しく掲示してありますのでご覧ください。また、不明な点は、専門職員（厚生担当）に問い合わせ願います。

## 学生教育研究災害傷害保険の 加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中・通学中及び大学の授業等、学校行事又は課外活動で施設間移動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っております。本保険は、学生の相互共済を基本として運営されており、学生生活中的の万一の場合に備え、全員加入の方針をとっております。

加入を希望する学生は学生課専門職員（厚生担当）に申し込んでください。

記

1. 受付期間 自 平成11年4月1日（木）  
至 平成10年4月16日（金）
2. 受付窓口 学生課専門職員（厚生担当）

## 平成11年度日本育英会奨学生の 募集について

日本育英会では、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する学生は、提出期限までに所定の書類を学生課専門職員（厚生担当）に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、専門職員（厚生担当）に相談してください。

# 平成10年度

# 1年のあゆみ

## 4月

10日 平成10年度入学式  
 医学科新入生 101名  
 看護学科新入生 60名  
 看護学科第3年次編入学生 4名



入学式

22日 医師国家試験合格発表  
 本学合格者 100名  
 合格率 90.9%

20～21日 医学科新入生研修



医学科新入生研修

23～24日 看護学科新入生研修  
 (於 大雪山白金観光ホテル)



看護学科新入生研修

## 6月

5～7日 第24回医大祭 医科(いか)フェスタ'98



30日 博士学位記授与式  
 博士学位記被授与者 7名

## 7月

10～13日 第45回北海道地区大学体育大会  
 当番校：北見工業大学

本学参加種目：陸上競技(男女)、  
 準硬式野球、ソフトテニス(男)、バスケッ  
 トボール(男女)、バ  
 レーボール(男女)、  
 サッカー、卓球(男)、  
 バドミントン(男女)、  
 剣道(男女)、弓道  
 (男女)、ハンドボール

成績：準優勝 ソフトテニス(男)  
 第3位 陸上競技(女)、  
 準硬式野球、バスケッ  
 トボール(女)、  
 バドミントン(女)

総合成績：男子5位 女子4位



地区体

23日 外国人留学生夏季オリエンテーション(大雪窯外)  
 参加者 留学生 9人 (家族) 8人

7月24日 第41回東日本医科学生総合体育大会夏季大会  
 ～8月20日 主管代表校：北里大学

本学参加種目：陸上競技(男女)、  
 準硬式野球、テニス  
 (男女)、ソフトテニス  
 (男女)、卓球(男女)、  
 バレーボール(男女)、  
 バドミントン(男女)、  
 サッカー、バスケッ  
 トボール(男女)、柔道、  
 剣道、弓道、空手道  
 (男)、水泳(男)、ゴ  
 ルフ(男女)、ハンド  
 ボール、ラグビー

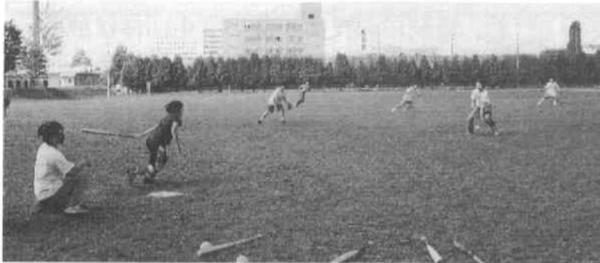
成績：第3位 弓道、ソフトテニス(男)

**8月**

8～9月 第32回全日本医科学生体育大会王座決定戦  
主管校：北里大学

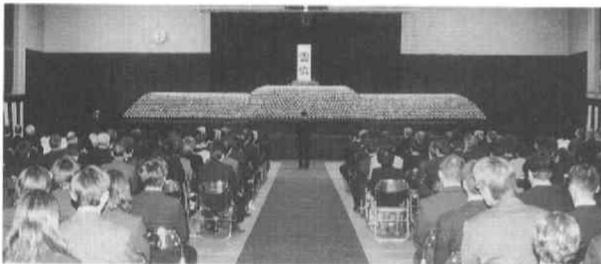
**9月**

9日 体育大会（学生主催）



体育大会

16日 平成10年度解剖体慰霊式



解剖体慰霊式

30日 博士学位記授与式  
博士学位記被授与者 5名

**10月**

6～27日 平成10年度公開講座  
「知っておきたい腎臓の働きと病気」  
（於 ニュー北海ホテル）



公開講座

10日 平成11年度第3年次編入学者選抜試験  
（看護学科）

28日 平成11年度第3年次編入学者選抜試験  
（看護学科）合格者発表

**11月**

5日 本学記念日

**12月**

5～6日 平成11年度推薦入学者選抜試験

15日 平成11年度推薦入学者選抜試験  
（看護学科）合格者発表

20～21日 スキー教室（於 富良野スキー場）  
参加学生 16名

（うち外国人留学生 6名）



スキー教室

25日 博士学位記授与式  
博士学位記被授与者 3名

12～3月 第40回東日本医科学生総合体育大会  
冬季大会

主管代表校：北里大学

本学参加種目：スキー（男女）、  
アイスホッケー

**1月**

16～17日 平成11年度大学入学者選抜  
大学入試センター試験  
本学会場 755名

**2月**

5日 山村晃太郎教授最終講義

10日 平成11年度推薦入学者選抜試験（医学科）  
合格者発表

18日 平成11年度大学院入学者選抜試験  
岩淵次郎教授最終講義

19日 金沢徹教授最終講義

25日 平成11年度第2次試験（前期日程）

26日 平成11年度大学院入学者選抜試験合格者発表

**3月**

8日 平成11年度第2次試験（前期日程）  
合格者発表

12日 平成11年度第2次試験（後期日程）

18日 退官教授歓送式

23日 平成11年度第2次試験（後期日程）  
合格者発表

25日 平成10年度学士学位記授与式  
学士学位記被授与者 99名

博士学位記授与式  
博士学位記被授与者 22名

## 学友会会章正式に大学の学章として承認される!!

昭和56年に学友会の一事業として学友会会章が制定され、制定2年後くらいに細菌学教室でレターペーパーに使用し始めたのが切っ掛けで、他の教室及び駐車場許可証等にも使用されていたが、この度正式に本学の学章として認められました。

大学として最初に使用予定しているのは学位記に印刷することになっています。

今後は多方面にわたり多に利用していただきたいと思います。(学友会)



# 惣 外

第二外科 助教授  
棟 方 隆

### 『クリニカルクラークシップ導入を試みて』

我が大学の医学教育における最近のトピックスは来年度入学生より実施される新カリキュラムであろう。これは早期体験学習や統合科目によって早い時期から医療・医学に触れることができ、チュートリアル教育によって自学自習の態度が身につけられ、さらに臨床実習の早期開始と期間延長が図られる。

第二外科教室では将来の新カリキュラムにおける臨床実習をより充実させるために現5年生から『クリニカルクラークシップ; Clinical Clerkship System (CCS)』の導入を試みた。既にご存知の方も多いと思うが、クリニカルクラークシップについて簡単に説明させていただく。CCSとは米国の医学部で行われている臨床実習教育で、学生が病棟での診療チームの一員として加わり、実際に患者を診療することを通して臨床能力を身につける臨床実習方法

## 学生団体の設立・継続届について

平成11年度において、団体活動を継続しようとする学生団体または新しい団体を設立する予定の学生は4月30日(金)までに設立・継続届を専門職員(学生担当)に提出してください。

なお、継続届の提出がない学生団体は解散として取り扱いますので注意してください。(学生課)

## 教官の異動

昇任 H11. 3. 1 外科学第一 助教授 稲葉 雅史

である。

当科では臨床実習の学生を病棟の各グループ(上部消化管、下部消化管及び肝・胆・膵)に数人ずつ配属させ、主治医達と共に行動するようにした。具体的にはグループの朝夕の回診は一緒に行い、それぞれの患者の問題点を検討し、あらかじめ教えた上でガーゼ交換や抜糸をさせている。手術では助手のひとりとして加わり、鉤引きをさせ皮膚縫合の糸縛りや糸切りをさせている。また術後は切除標本の写真撮影や郭清リンパ節の整理を主治医と共にし、術後の検査に立ち合わせ、質問を交えてその意義や結果をその場で解釈させるようにしている。医学生に行わせる医療行為は厚生省臨床実習検討委員会で示された「許容される基本的医行為」に従っているが、かなり事が指導のもとに可能である。このような実習では、当然朝は8時過ぎに集合し、帰りは手術が長引いたときには夜中になることもある。このような臨床実習を導入してから3グループを終えた。実習の最後に2週間の感想を書いてもらっているが、今までに比べて拘束時間が長く、質問等も多いので、不平が多いかと思っただが、結果は予想を反して好意的なものであった。『ハードではあったが、いろいろ体験できて勉強になった』、『外科に対する見方が変わった』、『先生方の苦勞を実感した』など満足度の高いものが多かった。学生に対する見方も若干変わり、何が重要なのかも少し見えてきた。

まだスタートしたばかりなので、まだまだ不完全なものであるが、今後は「学生がなにをどこまで学ぶのか?」、「主治医の一人としていかに責任感をもたせるか?」など、さらに検討改善していかなければならない問題も多い。

数年後に新しいカリキュラムでのチュートリアル教育を終え自主的勉学態度を身につけた学生が、このような臨床実習システムでどのような態度でいかに成長して行くかをみるのも楽しみである。